

原 著

*Macbeth*に於ける「時」のテーマ

島 崎 静 子

(The Theme of Time in *Macbeth*)

SHIZUKO SHIMAZAKI

*Macbeth*の悲劇を構成する重要な外的要素であるWitchたちはルネッサンス期の複雑な思想背景を反映しているため、その性格を説明するのは容易ではない。

ShakespeareがWitchたちに自らを呼ばせているように、彼女らはweird sisters (宿命の三姉妹)である。その原型はスカンジナビアの神話にでてくるUrda、Verdandi、Skuldaの三姉妹 (Normae)であり、ギリシャ神話の宿命の三姉妹 (Parcae)であり、魔女Circeでもある。その性格はこれらの原型となるものにキリスト教のSatanの性格が加わり、まことに複雑である。詳細はJames一世のDaemonologieを始めScotやHarsnet等の魔女に関する当時の著述書に依らねばならないが、その大要だけを述べるならば、魔女は基本的には悪意に満ちた存在であり、その能力は天使のそれとほとんど同じであり、地上の人間ではとうていかなわなような動作の敏捷性と非凡な洞察力を持ち合わせ、ある程度将来を見通すことができた<sup>1)</sup>。このような魔女の実存性は、亡霊の場合と同様に、当時の民衆の大きな議論的であり、国王James自身も並々ならぬ興味を持って研究をしていた。Shakespeareが魔女の存在を信じていたかどうかは定かではないが、*Macbeth*を国王の前で上演することを前提としていたという事実や彼が誰よりも民衆の興味に敏感であったことから、かなり意識的に魔女を登場させたことは事実である。

さてShakespeareという老練な劇作家の手にかかった魔女は人々の概念の世界から飛び出し、息をした生々しい存在として舞台を占領する。魔女を登場させた動機は確かに国王の興味を意識したことと話題性が大きかったという理由にあったかもしれないが、結果的にはそれは大成功であった。というのは魔女の持つ特性は人間*Macbeth*の内面を引き出す格好の材料であったからである。魔女は*Macbeth*の目から内に秘めた野心を読み取り、グラームズやコーダの領主拜命という小さな事柄で彼の信用を得、いっきに国王殺害という大きな事柄に彼を導き、やがて魂を奪い取ってしまう。この経過を表面的に見る限りでは中世の道徳劇か寓意の域を脱しきれない。ところがShakespeareはこの骨組みを利用しながら大きな普遍的なものに注目したのである。魔女には過去、現在の事はもちろん、未来の事もある程度予知する能力があると考えられていた。この魔女と時間の問題を、古くはアリストテレスやアウグスティヌスの

様な哲学者から現代の哲学者や物理科学者や心理学者までを思索に駆り立てて止まない「時間」という普遍的問題に発展させ、悲劇*Macbeth*を永遠の傑作とすることに成功したのである。

If you can look into the seeds of time,  
And say which grain will grow, which will not,  
Speak then to me, who neither beg, nor fear,  
Your favours nor your hates.

もしもおまえたちが時がはぐくむ種を見とおし  
どの種が育ち、どの種が育たぬか言えるものなら  
おれに言ってみろ。おれはおまえたちの好意も求めず、  
おまえたちの憎悪も恐れぬ男だ。 (I, iii, 58-61)

これは一幕三場で戦いを終えてフォレスに向かう途中の荒野でWitchたちからMacbethがグラームズとコーダの領主の拝命を受けるであろうという予言めいた言葉を聞いた時のBanquoのWitchたちへの挑戦的な言葉である。この言葉はCurryが彼の研究書の中で詳しく述べているように聖オーガスチン、ストア派そして新プラトン派などの「万物の生成を統括するのは時であり、万物は宇宙生成の根本原理によって生成されるので、時の種は宇宙生成の根源である」<sup>2)</sup>という原理に基づいたものである。この万物の生成を統括する「時」そのものが人には計ることもできず、いっさいを明るみに出すものでありながら自らをあらわにしないため、当時の人々にとってたいへん神秘的であり宗教的意味すら持っていたが、これは「時」の持つ普遍的な性質であり現代の人々にとってもそうである。この「時」の神秘的な性質について現代の科学哲学者である中村秀吉が「時間のパラドックス」(1980)のまえがきで次の様に述べている。

時間のことをつきつめて考えようとするとうわからないことがたくさん出てくる。時間は古来、哲学者たちを悩まし続けてきたものである。だが同時に、それは思索を好むものを魅了し続けてきたものである。それは、もっとも身近なくせに矛盾に満ちているため、われわれがそこに問題を見出すのは容易である。ところが、それはあまりにも身近すぎるため、時間概念、時間のことばは、われわれの概念装置・言語組織のなかにあまりにも深く食い込みすぎている。そのため、それを解きほぐして時間そのものについて語ろうとすると、すぐに循環論法に陥ってしまう。逆に、解きほぐしにくいから時間のことばは容易に詭弁の材料となり、人をたぶらかす手段となる。当然、時間の問題は論理学や意味論に多くの材料を提供してくれる。存在論の一の柱にもなる。

しかし時間はこのような思弁的な学問の舞台であるだけではない。もしそうなら、時間論はごく一部の人が興味をもたないだろう。時間は理性的に考察され

るだけでなく、感性的なものである。過去と未来はある意味で非存在であるが、あるいはそれなるがゆえに、過去の思い出や歴史の舞台、未来への空想は、人間の想像力を刺激し、多くの人を詩人にする。逆に、確実に到来するであろう、自分の死と空無は多くの人たちを恐れさせ、悩ませる。そしてそれは、多くの人たちを前のものと別様の思弁にさそい、宗教へといざなう<sup>3)</sup>。

「時間のことは容易に詭弁になり、人をたぶらかす手段となる」という一節は *Macbeth* を「時」のテーマで論ずる時、それが最もふさわしい表現であることがわかる。

時間には客観的時間と主観的時間が存在する。中村秀吉の上記の文によれば正しい判断や認識に達するための思考の進め方の形式や法則を明かにしようとする論理学と、言語表現とその指示する事態との関係を取り扱う意味論に用いる時間を理性的時間・客観的時間として考え、一方、ある一定の時間を人によって長く感じたり短く感じたりするような個人との関わりにおける時間を感性的時間・主観的時間として扱っている。この客観的時間と主観的時間という二つの時間の概念は、古くから Shakespeare の時代まで伝わっていたものである。これらはアリストテレスの一樣な円運動である天体の運動を基準として「時」を認識する方法と、アウグスティヌスの人間の心との関わり、つまり意識との関わりにおいて「時」を認識する方法の双方と呼応する概念である。そしてこれらの理性的・客観的時間と感性的・主観的時間が同時に認められるものであることから複雑さが生じ「詭弁の材料」や「人をたぶらかす手段」に容易になるのである。

次に *Macbeth* が「詭弁の材料」となり「人をたぶらかす手段」である「時」に関する言葉を Witch たちから投げかけられた場面を分析してみたい。

*Macbeth* が Witch たちから グラームズとコーダの領主として名を呼ばれたときの姿を Banquo は次のように述べる：

My noble partner

You greet with present grace and great prediction  
Of noble having and of royal hope,  
That he seems rapt withal :

おれのりっぱな友人は

おまえたちに現在の身分であいさつされ、そのうえ  
将来の出世と王位への望みまで予言されて、  
呆然としておられる。 ( I, iii, 54-57)

*Macbeth* はこの世のものとは思えぬ不思議な姿の Witch たちが現在の自分の身分を知っていることにまず驚き、コーダの領主になるであろうこと、そしてやがて国王になるであろうという予言めいた言葉に呆然としているのである。地の泡のように姿を

消そうとしているWitchたちに向かってMacbethは叫ぶ：

Stay, you imperfect speakers, tell me more:  
By Sinel's death I know I am Thane of Glamis;  
But how of Cawdor? the Thane of Cawdor lives,  
A prosperous gentleman; and to be King  
Stands not within the prospect of belief,  
No more than to be Cawdor. Say from whence  
You owe this strange intelligence? or why  
Upon this blasted heath you stop our way  
With such prophetic greeting? Speak, I charge you.  
待て、舌つたらずのもの言いをせずはっきり言え  
父シネルの亡きあと、たしかにおれはグラームズの領主だ  
だがコーダとは？コーダの領主は生きておる  
いまをときめく男盛りだ。いわんや将来  
国王になるなどとはコーダの話以上に  
信じられぬ話だ。 いったいおまえたちは  
どこからこの不可解な知らせをもってきた？  
また、なぜこの荒野でわれわれの行く手をさえぎり  
予言めいたあいさつをするのだ。おい言わぬか。

( I, iii, 70-78)

この台詞はMacbethがまだ理性的であることを証明している。Macbeth自身が見たことのないWitchたちが自分のことを知っていることに驚き、未来のことまでも予言めかして言うことに不可解さを抱いているのである。特に 'Say from whence/You owe this strange intelligence? : いったいおまえたちはどこからこの不可解な知らせをもってきた?' という言葉はMacbethが空間的あるいは時間的隔たりを認識する力をもっていることを示している。即ちMacbethは自分が現在存在する場所とは異なる場所と時間があることを認識しているのである。WitchたちがどこかMacbethの知らない場所でその知識を得た可能性は当然考えられるわけである。ところがWitchたちが姿を消した直後に国王Duncanの伝令としてやってきたRossの口からMacbethがコーダの領主に任ぜられたことを聞くと、この認識も不確かなものになってしまう。理性的であるはずのBanquoすら、

What! can the Devil speak true?

なに、悪魔も真実を語るのか ( I, iii, 108)

と驚嘆し、Macbethは次のように傍白する：

Two truths are told,  
As happy prologues to the swelling act  
Of the imperial theme.

二つの予言は真実であった  
王位を主題とする壮大きわまりない芝居には  
うってつけの幕あきだ。

( I , iii , 129-131 )

この段階に至ってMacbethの頭の中には現在という時間とその場の空間しかなくなってしまう。MacbethはただRossよりもほんの一瞬だけ早くWitchたちから事実を知らされただけである。確かにコーダの領主が処刑されることをまだ知らないMacbethにとってWitchたちの言葉は予言が実現したように思えるかもしれない。しかしそれはそんなMacbethにとってのみ実現したのであり、実際に予言が実現したわけではない。ここに「時」の持つ複雑な性格から生じるトリックが見られる。Macbethにコーダの領主の称号が与えられることはWitchたちがMacbethに告げる以前に舞台上で明かにされているが、この舞台を順序よく見ている観客たちは時間的あるいは空間的隔たりを感じるだけで、とりたてて「予言」とは考えられない。それどころかWitchたち同様、Macbethの知らない事を観客たちも知っているのである。ここでは観客たちは舞台を客観視することによって「時」を理性的にとらえているのに対し、舞台上のMacbethは小さな予言が実現し、これからとてつもなく大きな予言が実現するであろうことに思いをはせ、心をうち震わせ、時を感性的に個人との関わりでのみとらえている。物理的、客観的時間と個人的、主観的時間の複雑な絡みが展開しようとしているのである。

Macbethがグラームズの領主になったこともコーダの領主になったことも確かに万物の宇宙生成の根本原理に基づいて「時」が造りだした事実である。「まだ知らないが事実である」ということは「王になるであろう」ということも間違いなく実現するという裏付けには決してならない。前者を後者の強い裏付けとするものはMacbeth自身の内にある強烈な野心である。Witchたちの言葉によっていっきに燃え上がった野心のせいでMacbethは「時」の自然の原理を無視してしまう。彼にはもはや個人を無視して淡々と動く物理的時間は存在しない。理性的あるいは物理的には「現在」があって「未来」が存在するのだが、王座のことしか念頭にないMacbethには「現在」は存在しえず、ただ王座を約束された「未来」のみが存在するのである。Macbethが王座を得るために犯そうとするDuncan殺害を想像し“Nothing is, but what is not. (I, iii, 142) / 無いものを除けば、在るものはただ無いもののみ”と独白した瞬間Macbethのうちではrealityとunrealityが入れ替わったのだとWILSON KNIGHTは評している<sup>4)</sup>。

“reality”を物事が現実化している「現在」、 “unreality”をまだ物事が現実化しない「未来」という考え方によれば、「現在は未来でしかない」という「時」の自然の原理をまったく無視した考えになってしまう。確かにMacbethは「現在」を飛び越えて

「未来」に生きようとしている。そしてMacbethを悪に追い立てるもう一つの強力な外的要因であるLady MacbethもやはりMacbeth同様「時」の原理を無視している。彼女は手紙を手にもMacbethを迎えながら次のように言う：

Thy letters have transported me beyond

This ignorant present, and I feel now

The future in the instant.

現在は未来についてはまったくの無知ですが、あなたのお手紙はその現在をわたしに飛び越えさせました。そしていまこの瞬間、わたしは未来を感じています。

( I, v, 56-58)

Lady Macbethの場合も王妃の座への強い熱望が「時」の自然の原理を無視させるに至らしめた。MacbethにとってもLady Macbethにとっても「未来」は「王座」であり「至福」である。もはや彼らのその「至福」を求める気持ちを抑えるものはなにもない。彼等は「時の種」の成長をじっと見守るだけの忍耐力はなく、強引に「現在」を無視して「未来」を手元に引き寄せようとする。

「時」が「万物の生成」の統括者であるはずが、その場にMacbeth自身が収まろうとしている。背後で万人に共通する物理的時間が厳然として流れている中でMacbethの個人的時間は舞台の上で激しくそして空しく動く。隠されていた真実を全て明かにする「時」は孤軍奮闘するMacbethの姿を冷ややかな目で眺めている。

さてMacbethが自然の法則に逆らって「未来」を強引に「現在」と据え替えてしまった結果として得たものは「恐怖」のみである。彼は頭に浮かぶ全ての「恐怖」を即座に処理して「平和」を現実のものとしなければ、いつときも過ごせなくなってしまった。「未来」が「至福」であったはずが現実には「恐怖」と、それにともなう「不幸」であった。彼は自分の前に永遠に広がる「未来」が途方もなく続く「恐怖」と「不幸」を意味することを悟る。もとの「平和」を取り戻すためには失ってしまった「現在」を取り戻さなければならない。しかし一度過ぎ去った「現在」は決して戻ってはこない。Macbethに残された手段は生きている限り永遠にやって来る「未来」、即ち「恐怖」と闘うことである。

Macbethにとって「恐怖」の対象となる最初のもはBanquoである。Banquoの子孫にはMacbethが全てを賭けて得た王座が約束されている。Banquoの子孫は彼にとって途方もない「恐怖」を生み出す「未来」なのである。彼はその「未来」と、その「未来」を生み出す元、即ちFleanceとその父Banquoを抹殺してしまうことで「現在」を取り戻そうとする。しかし息子Fleanceを逃すことで彼は耐え難い「未来」を与えられてしまう。また四幕一場で兼ねてから挙動に不満を抱いていたMacduffがイギリスへ逃げたという知らせにMacbethは狂乱状態に陥る。彼はMacduffを即刻、その場で殺害して「恐怖」を無くしたいのである。イギリスへ逃げられたのでは時間的隔

たりと空間的隔たりが耐え難い「恐怖」を生み出すことになる。彼は狂人のように独白する：

Time, thou anticipat'st my dread exploits;  
The flighty purpose neer is o'ertook,  
Unless the deed go with it. From this moment,  
The very firstlings of my heart shall be,  
The firstlings of my hand. And even now,  
To crown my thoughts with acts, be it thought and done.  
時よ、お前はいつも俺の恐ろしい仕事の先手を打つ。  
羽のはえた目論見は動作がそれについてゆかない限り、  
絶対に追いつくことはできない。今この瞬間からは、  
俺の心に生まれた初兇はこれをすぐさま実行に移して、  
俺のこの手の初兇としなければならぬ。今の今とて、  
俺の考えに行動の王冠を載せるため、思い付いたことはすぐ実行だ。  
(IV, i, 144-149)

これらの言葉は自然の摂理を無視して「時」を敵にまわしてしまったMacbethの姿をよく表している。「時」は永遠に続く。その「時」に出し抜かれないようにMacbethは行動しなくてはならない。そしてその「時」を先に出し抜くかのようにMacbethはMacduffの妻子を殺害してしまう。それによって彼はMacduffの「未来」を抹殺し、やがてやって来るだろう「恐怖」の一つを無くしたのである。

しかしMacbethの心には「平和」が戻ることはない。Duncan王の息子達も、Banquoの息子も生きているという事実はMacbethの「平和」を阻む「恐怖」である。そしてMacduffも、今その場にいれば何とか対処できる存在であるが、遠く離れたイギリスの地にいるという空間的隔たりは、彼等同様Macbethに限りない「恐怖」を与え続けるものである。

Present fears  
Are less than horrible imaginings.  
目前の恐怖は  
恐ろしい想像に比べれば、まことに微々たるものだ。  
( I, iii, 139-140)

この台詞はMacbethが最初にDuncan殺害を頭に浮かべたときのものであるが、この言葉はMacbethの全ての悪事を説明してくれるものである。Macbethの勇敢さは実体を伴ったもののみ示され、実体の伴わないものにはただ恐怖心のみが誘発されるようである。戦場でのMacbethの姿をCaptainは次のようにのべている。

For brave Macbeth, - well he deserved that name, -  
Disdaining Fortune, with his brandish'd steel,  
Which smok'd with bloody execution,  
Like Valour's minion carv'd out his passage.

Till he faced the slave:

Which ne'er shook hands, nor bade farewell to him,  
Till he unseam'd him from the nave to th'chaps,  
And fix'd his head upon our battlements.

勇敢なるマクベスは（彼こそその名にふさわしきもの）、  
反徒の情婦「運命」の女神もものかは、鋼鉄の刃を振りかざし、  
血煙たてて敵兵どもを薙倒し、

あたかも「武勇」の愛人のごとくに、己が血路を切り開き、  
ついに件の下郎と顔を合わせました。

と見るや、暇乞いの握手もあいさつもあらばこそ、  
一撃の下、へそから顎への縫目を解きほぐしてしまいました。

然して彼の逆賊の首級をばわが城塞に打ち掛けました。

( I, ii, 16-23)

またRossの言葉によるとMacbethは敵を次々にかたづけ、自分の打ち倒した累々たる屍の恐ろしい形相もものともせず、あたかも新たなゴルゴタの丘を築こうとするかの勢いで武将としての力を発揮する。CaptainとRoss両者の言葉から判断すると彼はどんな恐ろしいものでも実際に目の前に存在するものは勇敢に立ち向かうことができるのである。ところが彼は実体のないものにたいしては病的なほどの恐怖を感じるのである。Banquoの亡霊におののきながら彼は叫ぶ：

What man dare, I dare,  
Approach thou like the rugged Russian bear,  
The arm'd rhinoceros, or th'Hyrcean tiger;  
Take any shape but that, and my firm nerves  
Shall never tremble: or, be alive again,  
And dare me to the desert with thy sword;  
If trembling I inhabit then, protest me  
The baby of a girl. Hence, horrible shadow!  
Unreal mock'ry, hence!

男ならやるということなら、俺はやるぞ。

働猛このうえないロシア熊の格好で近づいて来るなら来い、

甲ちゅうで身を固めた犀、それどもハーケイニヤの虎、

その格好以外のものなら何でもいい、それならこの俺の強い筋肉が、



打ち震えることなどは断じてないぞ。さもなくば生き返って来い、  
そしてその方の剣をもって人踏まれな場所へ俺に挑め、  
もしそのときこの俺が震え上がっていたなら、天下に公言してよいぞ、  
俺は赤ん坊のような女子どもに過ぎんのだと。下がれ、恐ろしい影奴！  
実体なき幻奴、下がれ！

(Ⅲ, iv, 98-106)

どんな恐ろしいものでも実体のあるものであるならば、全く動じないが、実体が無いものが故にBanquoの亡霊はMacbethにとってこの上もなく恐怖を感じさせるものである。その実体の無い恐怖とは正に彼の心の平和を乱す彼自身の想像(憶測)でもあり、現実には存在しない「未来」でもある。その実体の無い恐怖に対処するためには彼は想像したり考えたりすることを止めなくてはならない。Macbethは宴会に顔をださなかったMacduffのことを気にしながらLady Macbethと次のような会話のやり取りをする：

Macbeth : How say'st thou, that Macduff denies his person,  
At our great bidding?

君はどう思う？ マクダフが国王たる予の命令に反して顔を見せなかったことを？

Lady Macbeth : Did you send to him, Sir?

使いの者はお出しになったのでしょうか？

Macbeth : I hear by the way; ……

たまたまその旨を耳にしたのだ。

この二人の会話は直接的で実際的にもものを表すものではなく、間接的で感覚的なものを表し、Macbeth自身が想像上の恐怖をつのらせる様子を巧妙に表している。MacbethはDuncan殺害を実行する前に‘Words to the heat of deeds too cold breath gives : 言葉は熱気のこもった行為にあまりにも冷たい息を吹きかける。(Ⅱ, i, 61)’と言って考えを表す手段であるwordsを否定した。それと同様にMacduffに対する行動をする直前に彼は独白する：‘Strange things I have in head, that will to hand, / Which must be acted, ere they may be scann'd : おどろくべきことを俺は考えている、すぐ実行に移すのだ。あれこれ勘案することなく直ちに行動に移さなければならない(Ⅲ, iv, 138-139)’彼にとって「考え」や「言葉」は恐怖を取り除くための行動を阻止するにすぎないものでしかないのである。「考え」や「言葉」は理性と論理性の産物であり、実は彼の最も嫌う漠然とした実体のない「恐怖」を阻止したり緩和したりする力を持つものであるが、その「考え」や「言葉」自身、実体のない静的なも

のであり、時間的な「間：(ま)」を創り出すものであるためMacbethには相容れないものなのである。そのようなMacbethには、もはや自然の秩序に向かう力もなければ、静止することによって自然に秩序を呼び戻すこともできない。彼はさながら妄想した恐怖におののき、事物のもとに気楽に逗留することができず常に未来を先取りし、現在よりも一歩先を読もうとして落ち着きなく動き回る精神分裂症の症状を呈している。疲労の重なりに加え唯一の心の共有者である妻の死を聞いたときのMacbethの言葉は実に重々しく響く：

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,  
Creeps in this petty pace from day to day,  
To the last syllable of recorded time;  
And all our yesterdays have lighted fools  
The way to dusty death.

明日、また明日、また明日と、時は  
こきざみな足取りで一日一日を歩み、  
ついには歴史の最後の一瞬にたどりつく、  
昨日という日はすべて愚かな人間が塵と化す  
死への道を照らしてきた。

(V, v, 20-25)

どんなに立派な生き方をしてきた者でも、またどんなに邪悪な生き方をしてきた者でも生きている一瞬がすべて死の一瞬へと結び付くものであるという真実を垣間見たときの人間の心理はこのMacbethの独白とまったく同じであろう。しかし早々に自然の秩序を乱し、やって来る未来すべてを敵にまわしてしまったMacbethにとっては格別な意味があるように思われる。死を待つ静けさや覚悟の他に疲労、倦怠そして絶望が色濃く漂っているのである。死に至るまでのすべての「一瞬」は彼にとって絶え間なく襲って来る無数の姿なき敵なのである。彼は最後に、「もはや陽を見るのもいやになってきた」ともらすようになる。ここに私達は比類なき悲劇Macbethの真髓を見いだすのである。

「現在」を中心に「未来」と「過去」は連結するものであり、客観的あるいは理性的には分離することのできないものである。木村俊夫はMacbethはこの分離不可能な「過去」、「現在」そして「未来」を狂的に切り離そうとしたのだと論じている。確かに「時の種」の自然の成長を待たずして「現在」を飛び越えて「未来」に生きようとした点でそうだといえよう。「過去」も「未来」も非存在であり、そこには「思い出」や「記憶」そして「空想」や「想像」が漠然とあるのみである。Macbethは不正な手段で不自然な方法で手に入れた「未来」を処するために「空想」や「想像」を悪用し「恐怖」と「憶測」と「妄想」を生きる手段としてしまったのである。「空想」や「想像」は人を詩人にするが、Macbethはそれらの悪用によって常に何かにおびえている狂人となってしまった。

さて「時の流れ」のなかの「未来」という非存在的なものを、作者ShakespeareはMacbethに与え、もう一方の「過去」という非存在的なものをLady Macbethに与えた。Macbethがただひたすら「未来」という姿なき敵と狂人のように戦っているのに対し、Lady Macbethは「過去」の「記憶」という非存在的なものに呪縛され、夢遊病患者となる。「過去」は「忘却」という大きな作用力を持ち、全ての過ぎ去ったものを消滅させてしまう。人は全てのものを明確に記憶しておきたいと願望しがちだが、不完全な存在である人間にとって、この「忘却」は不可欠であり恵みである。人間は恥じ多き人生をこの「忘却」作用なしでは生きることができない。Lady MacbethはMacbethと共に「現在」を無視して「未来」へと不自然に飛び越えた瞬間から「過去」という過ぎ去って消滅していくべき世界に幽閉されてしまったのである。ある意味では木村俊夫の論ずる「過去」「現在」「未来」の分離はここでなされているとあってよからう。「現在」を抹殺することでMacbethとLady Macbethはそれぞれ「未来」と「過去」という断絶された世界に隔離されてしまったのである。「過去」という対岸に取り残されたLady Macbethを案じながら、Macbethは医者無力さを詰って言う：

Cure her of that:

Canst thou not minister to a mind diseas'd,  
Pluck from the memory a rooted sorrow,  
Raze out the written troubles of the brain,  
And with some sweet oblivious antidote  
Cleanse the stuff'd bosom of that perilous stuff  
Which weights upon the heart?

それをなおしてやってくれ。

おまえにも心の病は手に負えないというのか？

記憶の底に根を張った悲しみを抜き取り、

脳裏に刻みこまれた悩みをぬぐい去り、

忘却の甘い解毒剤をもって、重い胸から

心を圧する危険な思いを洗い流す、それが

おまえにもできぬと言うのか？

(V, , 38-44)

「過去」－「現在」－「未来」という「時」の秩序ある連結は、Shakespeareの時代の「存在の鎖：chain of being」の概念と一致するものである<sup>5)</sup>。当時の考えでは、マクロ的には、神を頂点に天使、人間……植物、無生物の順で存在の秩序が守られ、ミクロ的には、国王を頂点にそれぞれの者がそれぞれの立場に収まっているべきであった。この整然とした「存在の鎖」の連結に僅かでも乱れが生じると、それは直ちに転変地異や戦争というカオスを意味した。Shakespeareはこの伝統的なカオスの概念をMacbethの王位略奪という行為によって表現した。そしてその伝統的なカオスのなかに彼は「時」という普遍的な問題を絡めた。「過去」－「現在」－「未来」という「時」

の連結は、物理的・客観的な「時」の存在である。ところがこの「時」には同時に感性的・主観的な「時」も存在する。そして実に複雑なことに、「時」は創造的であると同時に破壊的でもある。この相反する性質をもった複雑極まる「時」の普遍的な問題をShakespeareは巧みに伝統的なカオスの表現法に絡み合わせることによって、悲劇*Macbeth*を永遠の古典とすることに成功したようにおもわれる。

## 注

- 1) *The Royal Play Of Macbeth*, p. 90 pp. 130 (James And The Witches 1603, James And The Witches 1605) HENRY N. PAUL
- 2) Shakespeare's *Philosophical Patterns*, p. 29 pp. 49 (Chapter II: Tumbling Natures Gernens) WALTER CLYDE CURRY
- 3) 「時間のパラドックス」、序文
- 4) *The Wheel of Fire*, p. 153, WILSON KNIGHT
- 5) *The Elizabethan World Picture*, p. 37 pp. 50, E. M. W. TILLYARD

## テキスト

- Shinozaki Readers' Shakespeare *Macbeth* (1972)  
The Arden Shakespeare Paperbacks *Macbeth*, by KENNETH MUIR (1969)  
The New Shakespeare *Macbeth*, by John Wilson (1970)  
マクベス：大山俊一（訳）、旺文社文庫、(1968)  
Macbeth：小田島雄志（訳）、白水社Uブックス、(1991)

## 参考文献

- CURRY, WALTER CLYDE: *Shakespeare's Philosophical Patterns*, Louisiana State University Press (1959)  
KNIGHT, G. WILSON: *The Wheel of Fire*, University Paperbacks (1974)  
PAUL, HENRY, N.: *The Royal Play of Macbeth*, Octagon Books, New York (1971)  
TILLYARD, E. M. W.: *The Elizabethan World Picture*, Penguin Books (1970)  
木村俊夫：「時の観点からみたシェイクスピア劇の構造」南雲堂 (1971)  
中村秀吉：「時間のパラドックス」中公新書 (1980)